加舎白雄の奥羽行脚について（下）

矢羽勝幸

四、也寥訪問と『枕表紙』

白雄たちが宮城県柴田郡船岡町の也寥を訪れたことはすでに述べたが、この時松露庵に託された芭蕉手沢本『枕表紙』や也寥・船岡俳連等について少々触れておきたい。

『枕表紙』は今日所在を明らかにできないが、その概要について『俳諧帋表紙』では次のように述べている。

枕表紙　縦四寸四分、横六寸四分、紙数八十八牧(枚)、首尾に白紙を加ふ、標題枕表紙とあり、表紙渋色、綴糸色わずか、増山井かみしもを合巻にせしもの也

芭蕉翁真蹟書入　六百八十八処、文筆の長短さま〴〵なり

同　真蹟下紙　其用なるところへ糊し置れし也、下紙の広狭又さま〴〵也、すべて百七十七牧(枚)

同　真蹟朱書入　八処

一巻の真蹟書入下紙ともに真名、仮名二様の細字也

墨消　七処

芭蕉翁嚢中にせられし年月ははかりがたし、元禄七より安永二年にいたりて八十載を歴、文字鮮明也

これによると芭蕉がその師北村季吟の季寄『増山の井』（寛文三年十一月奥書）二巻を合綴し、文中各所に書込や下げ紙をしたもののようでこれを旅中携行「常に枕とし、枕表帋と題して教を訓詁したまひしものなり」（『俳諧帋表紙』烏明文）。元禄七年夏関西に下った折、『おくのほそ道』素竜本などとともに伊賀の生家に残し、そのまま大阪で他界しまう。服部土芳がその後芭蕉の兄からこれを得、子の亀毛、也寥（土芳縁者）と伝わったことが『俳諧帋表紙』に記されている。

安永二年冬、信州松代から江戸の梧庵に宛てた手紙にこの『枕表紙』に触れた部分があり、真蹟の箇所など微妙に異なるところがあるので紹介しておこう。

枕表紙一冊　古板増山井二冊合巻にせしもの也

右は祖翁生涯遊帋にこめ置れしもの也。

真蹟書入　六百七十八所

朱書入　八所

墨けし　七所

真蹟のさげ紙　百七十八枚

右奥州船岡大光禅寺碓花坊也蓼（ママ）の所持也。こハ伊賀上野産にて土芳老人の猶子なりし。風雅は兼而鳥酔先師の門人にて御坐候キ。必葯の身のうへならんにて、何人の手にワたり候もはかりがたきよしにて、此度松露庵什物ニゆづりうけ申候。尤碓花坊此一冊を所持と申事、世の人もしるところにして、雪中庵蓼太其外よりもいろ〳〵乞請候事数年なりしよし。此度鳥師の因ミありしゆへ、ゆづりうけし事道の本望不過之候。御よろこび可被下候。ばセを忌には出席の人々へ見セ申候。

也寥が松露庵に譲るについては、右の理由のほかに安永初年当時病気がちであったこと、永年滞っていた『俳諧古にし夢』

の出版援助依頼などが考えられる。

也寥は明和七年四月、平泉の高館に遊び、芭蕉の名吟「夏草や」の句碑を建立した。

その建碑記念集を企て、諸家の作品を集めたが出版することができずむなしく三年の月日を過ごしていた。この編集に直接たずさわったのは也寥門人の白露庵柳美である。也寥はかつて蓼太や烏酔らから懇望された珍本『枕表紙』を松露庵に与えることを条件に建碑記念集の出版を烏明に依頼したのであった。『俳諧古にし夢』の烏明序文は『枕表紙』をうけた安永二年の十月に執筆している。

閑にしぐるゝ日我荊扉を推すものあり。誰と咎むれバ是と答ふ。見れバミちのく船岡の僧柳美子なりけり。……遊岱より一書を出して見せしむ。是やそこの碓花坊のぬし高館の覧古に　祖翁の碑を樹立せし趣也。後に諸国同好の言の葉を集め既に石室に副むとして力たらず、たゞ瓦鶏の如しと語る。余がいふ、庵に歳々月次集と号て同門四時の句を撰す、衲のしれる所也。此冠に置て其志のせちなるをたすけ補むや。柳子起騰の色をなししきりに其集に合しせむ事を願ふ。まかせて加えそのむかしこそ慕しけれとさちに古にし夢とハ題し早。

癸巳のとしはつ冬　　松露菴主人

印　印

烏明のいう「月次集」は『かはい南浦の春』『乙未春帖』のように例年出版している松露庵の春興帳のことであろう。のちに「松露庵随筆」と改題する。

『俳諧古にし夢』は半紙本一冊で三十三丁。このうち前半十一丁分が建碑記念集で残りが例年同様の内容になっている。烏明の序に続いて高館の芭蕉句碑の図とその碑面（陰刻）、芭蕉句を立句として巻いた柳美、也寥、酔石、魯雀、杜園による一順の脇起表六句、建碑の由来記「弁語」がある。以下は諸国の俳人たちから寄せられた発句（祝儀の句は少ない）一三八句が続く。末尾は、松島瑞岩寺における烏酔句と也寥、柳美の主催者作品で締めくくっている。

同書によると船岡には竹云、雨暁、素蝶、橋笑、素柳、左凉、西坡、柳美の八名の俳人たちがいたようだが、このうち素蝶は平井氏、英花坊といった。『宮城県史』十四巻には、『柴田郡誌』（大正十四年刊。柴田郡教育会編）口絵にのる素蝶子孫旧蔵の次の也寥真蹟を転載紹介している。

ばせを翁桃青　麦林斎乙由　麦阿柳居
露柱庵鳥酔　海雲庵碓花　英花坊素蝶
船岡の風子に表徳を望まれて素蝶と写す
木の本に春のこぼるゝ胡蝶かな
碓花坊

素蝶子

也寥の俳系ともに素蝶が也寥の門人であることを明示する資料である。

ところで也寥・白雄の周辺に素鳥というよく似た俳人がいる。まず、天明四年杉坂百明が平泉を訪ねた折「つとめて法泉院を訪ふ。こは江都なる素鳥和尚のこのかみのあられける院也。素鳥和尚の添ぶみをしも出す」（『奥往来』）と記す素鳥である。

もう一人の素鳥は、やや時代が下り文化初年の人である。也寥の高館に建てた芭蕉句碑は、天明頃同地の音頭石という場所に移され（天明九年刊『平泉旧蹟志』）さらに文化三年には毛越寺にあって碑面もはなはだ風化していた。これを文化三年四月再建したのが慈眠庵素鳥とその同輩松谷、支遠里などであった。平泉町毛越の感神院に伝わる再建碑の文書に次のようなものがある。

ばせをてつたい花也寥禅師柴田郡舟岡に錫を止め、律梁のあたり風流に足をとぼすこと年あり。この禅師や翁終えんの折、夏草の遺章記念におくられしを常に懐にして離さず、幸この地に杖引く折りからその真蹟を石に彫り付け夏草塚と

呼べりけりしかばいずれとも星移り物かわりて泥土集りて石埋み、青苔なめらかにして文字さだかならず。さればこたび新に石をもて石にならぶ。これ名利とにほこるにあらず、ただもろ邦の風士訪いほい安からん事を思い、その流れを汲むの徒と後世に翁の徳をかかげん事をねがう。

時文化三年卯月日　桜川慈眠庵主素鳥

この頃になると也寥もかなり伝説化し、芭蕉の臨終にたち合ったことになっている。碑面も芭蕉の真蹟ということにされているが『俳諧古にし夢』には何の記載もないからこれも想像の域を出まい。

平泉の月見坂に俗に弁慶の墓といわれる石があるが、その傍らに

色かえぬ松のあるじや武蔵坊　素鳥

という鏡型の句碑が建てられている。この素鳥ははたしてどちらの素鳥であろうか。

さて船岡大光寺に滞在した白雄は也寥について本格的に禅を学んだらしい。白雄がここで詠んだ

よく寝て目ざめし時や秋の声

は、次の『在田利見抄』（宮城県迫町佐沼の邑主亘理氏家臣鈴木春英著。文政十年刊）の記事を読むと解釈が一変する。やや長いが奇話であるので『仙台叢書』巻四より全文を紹介する。文中の「原田氏」は伊達騒動の原田甲斐、「来迎寺」は大光寺のことである。

夜話艸

柴田郡船岡は。寛文之頃原田氏の在所にてありしに。彼家滅亡の後。當主の御在所とはなりぬ。同所に來迎寺と申寺是あり。其住持之僧五十年以前には。也蓼（ママ）と申され而伊賀の國の産。俳士芭蕉肉系の人にて。道徳に富るのみならず。風雲花月にむかひては。俳諧をもて第一の樂とせられける程に。其徒も多く參りぬ。佐沼の修驗者に。俳名醉石と云風人在りき。元來其道の好者なれば。同氣相應するならい也蓼とは。斷金の友なれば。時々船岡へも杖曳きしとかや。然る

に醉石或時話しけるは。來迎寺へ始て見廻せし頃は。十月の初夜長の時なれ共。始而の事にしはあり。挨拶の句相互にせし斗にて。句は明日と佗早く寢ん事を希て。客殿の脇六疊と眠藏との中の間に。布團かふりて草臥はしたり。一睡丑三つにもあらんか。漸目覺し所客殿の天井にて。其重さ萬斤もあらん物落たる音に。魂をうばゝれたる所。夫よりせめ馬の翔ちかふがごとく。或は雷かゝるやうになり。少間して下へおり。本尊の前にかざり置し。靈位・經案・其外佛具共。微塵になりたる音。戸障子をうち破り。唐紙を裂いきほい。瓦落〳〵びし〳〵として。言語同斷身の毛よ立とは中〳〵の事。叫んとして聲出ず。起んとするも手足少もうごかず。惣身に汗ながれ冷入。只々心中に念佛申斗りなりしが。半時も過しと覺る頃。納所の僧燭して來り布團を披き申樣。疾と失念を致し御斷不レ申候。今夕之騷ぎ御動轉なされ候半。和尚只今心付れ愚僧に。御見舞致候樣申付られしと言。其時漸く生た心地して。舌少動き候まゝ挨拶に。我等心魂を消し候はさて置。客殿の破損いかゞと申候へば。納所申には。夫は一圓無レ之事に候。最早夜明にもちかく候へば。御ひるなり候而御覽候得と申に付。起立て見候へば。位牌一つ仆れ申さず。戸障子壹間も不レ破席上塵すらなく。餘りふしぎの故。和尚に根問しければ。さればの事に候。毎夜の事にも無レ之候。初而の客來の時決して有レ之事に候。其故あたる事むかしより不レ知と見へたり。愚僧心付しは當時の大檀那の先君。往にして寛文の頃原田狼藉の節。御仕留被二成置一候脇指當寺へ納り在レ之候。大事之御場所柄にて。其時御仕留なされ候へは。御入へ志候事に見得申候間。御一身の力にて。御握り結被二成置一候御手の指の跡。三本共に小筋まで血にて。形付革柄へ睚と入付見得申候。御一心にて御指通し被二成置一候故。其手にて原田は死候と見得たり。然は尊靈于レ今嚴然と存在かと存られ候。よつて愚僧乍レ不レ及本堂の後の石岩へ。千躰佛彫刻の念願候と語られ候。誠に百年之後まで。忠義に凝りし威靈之存候事。有がたき御事と醉石が物語を以書留候事。

右脇指之銘相馬國正のよしなり。

醉石については後述するが、白雄はこの人の案内で平泉の古蹟を巡った。醉石を紹介したのは也寥ではなかったか。

右文の末にみえた也寥刻の千体仏の数は減り、尊体も損なわれてはいるがいまも大光寺の裏に現存する。昭和八年六月十一日ここを訪れた諸九尼も「舟岡の大光寺と申御寺に行、これは也蓼(ママ)和尚と聞えおはします大徳なり。手づから五百の羅漢の尊像をきざみて、後の山に安置し給ふを結縁す」(『秋風の記』)と記している。

その後、白雄と也寥は頻繁に文通し、表2にみるように白雄編著への出句率も高い。

也寥禅師のせうそこにむくふ

みちのくやいく関の戸を初便　(『しら雄く集』ほか)

也寥禅師の消息に酬

ながき日やみちのくよりの片便(真蹟『春秋稿』八編ほか)

也寥禅師の画に

松嶋をよく見て句なき翁かな　(『春秋稿』四編)

也寥筆の芭蕉像(木版・陰刻)は伊賀上野の芭蕉翁記念館に一幅伝存しているがこの種のものを依頼されてよく描いた様子である。

天明四年十一月、也寥の訃報(仙台の図南便)が届いた折、春鴻、柴居、古慊、我脱(保吉)、燕羽、呉水(長翠)らを集め、さっそく

みちのくの空たよりなや霜の声　白雄

を発句に歌仙を巻いている。

五、仙台俳壇と白雄

仙台城下及びあの辺にてもよほど通志のものもいでき御よろこび可被下候。

奥羽の旅から帰り、信州松代より江戸の知己梧庵に宛てた手紙の一節である。

紀行文の中では故意に旅中の贈答句を省いているが、仙台周辺で複数の俳人と交渉があったことは、『白雄贈答』によっても明らかである。

『白雄贈答』の配列はほぼ年代順になっているが、銚子以後の配列も次に示すように時間的に正確である。便宜的に番号を付けてみる。

銚子江蒼芦観にのぼりて

(一) 秋すゞし漂木も芦のとも戦ぎ

みちのく行脚のころ白川の烏黒をとひて

(二) 関越し秋風のたもと先見せん

船岡大光禅刹にやどりて

(三) よく寝て目ざめし時や秋の声

あが友子得ぬしが分家なる仙台城足堤氏のもとにやどる。両家ともに霊薬を鬻でその家名世にひろし

(四) おなじ香の薬を秋のしるべ哉

千賀老人は雲裡坊の門にしてとしごろはいかひをたしむ。こたび長子を我門に入て一句を乞まゝに

(五) 老見よや我はその子が菊の友

丈芝坊をとふにあるじはさきごろあが庵をとひて都をさして出しが石山の月に嘯ていまだかへらずとよ。家弟ま

めやかにもてなす。ともに千里の旅行ものなつかしくて

（六）月の旅くもらで世をや西ひがし

光円蓮社をとひつゝ山主あざりの虚日なき行法を感じて

（七）露軽し袖に日護摩のけぶり哉

金馬が居にあそびて

（八）市中に露ちる音ぞ夜の庭

むさし野のほくして宮城野にひそまるなどゆかしきを投ぜし淇川に対す。

（九）萩見んと来しぞ故郷ハおもへども

さきごろ草庵をとひし瓦竹衲のもとをとふにいまだ旅にありと聞て

（十）春ならば留守なるまじを寺の秋

高館の覧古心にこめて右ひだり蒼樹を友に杖ひく折から左沼の酔石我をむかへんと遠きを遠しとせず馬にまたがりて声をかく。まことに同門のちなミ浅からずもやがて山笑庵にともなはれ侍る。

（十一）並松の露へだてなきちぎり哉

城南鷺老人半月庵といへるをむすびしよし宮城の近き客亭へつげこしけるに

（十二）庵遠し萩をこゝろにおくらばや

（四）から（十）までが仙台における贈答作品である。ちなみに奥羽行脚関係の贈答句は（十二）で終わり、以後はない。つまり以後平泉、出羽、越後と旅はまだ延々と続き、俳人とも会っていると思われるのだが贈答句を贈るような懇意の人がいなかったということであろう。仙台地方は白雄の奥羽行脚の中で最も俳人交渉の繁かった地域であった。

（四）の子得は伊勢松阪の人で、白雄は

もみぢせし四五百の森をませのひとへに庵つくりせし子得ぬしが風流をことぶきて

げに錦はいりの庭に先たゝん

子得が別業

抱く茶の香いとゝもに木香すゞし

（『白雄贈答』）

等の作品を贈るほど昵懇な関係にあった。その子得の分家で薬種商であった堤某を訪れたのが（四）の句である。白雄が奥羽行脚を計画したのは明和八年から翌安永元年の松阪滞在中のことで、この時すでに松阪の斗墨を同行することにきめていた。この折白雄が子得と対面していたことは次の前書によっても明らかである。

むとせばかりむかしなりけり。みちのく行脚おもひたちしころねもごろに聞へし子得に時あるけふ一葉庵をとはれて

わすれずの菊にしたしき此日哉

（『白雄贈答』）

（五）は仙台の雲裡坊門千賀がその長男を白雄に入門させた折の作品である。仙台俳壇は元禄二年芭蕉が来遊してもすぐ蕉風が流行せず長らく三千風流が中心を占めていた。その後寛保から延享の間に美濃派の行脚俳人渡辺雲裡坊が仙台に仮寓し、ようやく蕉風の端緒が切られたという[10]。千賀もその頃の人であるらしい。長子の俳号は記されていないがあるいは『俳諧帋表紙』にみえる菊史であろうか。菊史は国分町の人、菅原屋甚左衛門といった[17]。

（六）の丈芝坊は中興期の仙台でその人ありと知られた山田白居である。国分町十九軒の人で屋号をやまだや、名を庄兵衛といった。本業は板刻師である。かの画工加右衛門由縁の者らしい[18]。俳諧ははじめ雲裡坊に、のち暁台についた。

（六）の「あるじはさきごろあが庵をとひて」は安永二年春白居が江戸に白雄を訪問した事実を述べている。その後名古屋に暁台を訪い、八歳も年下の暁台に入門、京都では蕪村一派と風交し、この年刊行された几董の『明烏』に丈芝の名で出

句している。秋・冬にかけて京、名古屋の間を遊び、暁台、蕪村と特に親密になった。この期の両派の俳書には白居の作品が多く納められている。安永二年は京から名古屋へ、そこで越年、六月中旬帰郷にあたって羅城の執刀で髪を下ろし、名を丈芝坊白居と改めている。

仙台で白居の留主宅を訪れた白雄は、その弟の懇ろな接待にあった。白居はその後東北地方を代表する暁台門下になるが白雄とは生涯親密な交際を続けている（表2参照）。白居は白雄や暁台よりも長生きし、寛政十二年十月九日、七十七歳で他界している。

（七）の光円蓮社は「蓮社」とあるから日蓮宗寺院と推定されるが、現在仙台周辺にある光円寺は青葉区北山二丁目の天台宗寺院のみである。同寺に問合わせたところもと寺小路にあったが仙台空襲で全焼、戦後現在地に移転した由。古文書も焼失し現存しないということである。『仙台市史』七巻（昭和二十八年刊）によると同寺の実永住職は伊達政宗の信仰をうけ、仙台城本丸築造の折地祭を修したという。

（八）の金馬は表2にあらわれない。暁台の『二編しをり萩』（明和七年刊）に白居の冬至庵社中の一員として出句する。白居の縁から訪問したものであろう。また諸九の『秋風の記』にも作品がみえる。

（九）の淇川は『俳諧古にし夢』『俳諧帋表紙』に入集する。

（十）の瓦竹は「衲」とあるから僧侶である。「さきごろ草庵をとひし」とあるが、その折、白雄が贈った作品は

みちのく瓦竹衲にとはれし
かたられよ松かぜかほる嶋のかず

（『白雄贈答』）

おそらく白居とともに白雄を訪れたのではなかろうか。『俳諧古にし夢』『俳諧帋表紙』に入集する。

（十二）の鷺老人は明らかでない。

白雄が訪れた安永初年の仙台俳壇は、古くからあった三千風系（朱角）や雲裡坊系（白英・芳妍）に加え、江戸の大島蓼太系（寛保三年入仙したが門人が出来ず、再度明和二年入仙、一勢力を築く）、江州日野の青燈下祇川（謙阿）系、名古屋の加藤暁台系（のち白居によって結束）など新たに参入し、かなり複雑な様相を呈していた。

明和七年暁台が『二編しをり萩』の旅で入仙した折も雲裡坊系の冬至庵社中がこれを迎え[19]、白居のように新風の暁台に傾・斜していく俳人も現れてくる。『二編しをり萩』に入集する人々はすべて暁台門人というわけではないのである。

白雄が安永二年仙台で交遊した俳人は瓦竹、吹路、淇川、定之、時来、菊史（以上表2）千賀、金馬、鷺老人（以上『白雄贈答』のわずか九名にすぎなかった。千賀、金馬、鷺老人の作品が『俳諧帋表紙』にみえないことからすれば、その交わりの程度も自ずと明らかである。

先に奥羽行脚における『白雄贈答』の作句傾向をみたように旅中最も贈答句の多い地域は仙台であった。しかしその実体は、十名に満たない少数者で終わった。この奥羽行脚を、勢力開拓という一点のみでみるならば、残念ながら失敗に終わったということになる。仙台は何といっても東北地方第一の都で文化的にも古い伝統があった。芭蕉が強固な三千風系に阻まれてほとんど素通りしたように、白雄もさしたる成果を上げることなくこの地を去っている。

しかし、興味深いことには、この旅から八、九年後、この仙台に白雄を慕う人々が現れ（表2）天明期東北における白雄社中の一拠点に成長するのである。その数は十四、五名であったが、中には後期俳諧を代表する鈴木道彦のような大きな存在も含まれているのである。

表2を春秋庵設立（安永九年春）を境に前・後に分けてみると。也寥（船岡から移動）や白居（暁台門。友情的出句）のような例外を除いて前・後まったくメンバーが入れかわっていることがわかる。前・後を通じて共通なのは唯一吹路のみである。結局、安永二年の仙台行脚は、白雄が当初所期したような結果は得られなかったが、その折蒔いた種は、まったく無

駄に枯死したわけではなく、はからずも次代に至り開花したというのが実態であろう。

ここで後期（天明期）における仙台春秋庵社中を一瞥すると、図南、露甲、蟻則らがその中核になっており、『春秋稿』への投句率も高い。このうち図南については、天明二年刊『春秋稿』二編に

図南がめぐみし帋ぎぬにことしの三冬をしのぐこゝろを

霜八たび猶しも契る帋衣哉　白雄

の句がある。「帋ぎぬ」は、みちのく檀紙で製した紙衣のことである。白雄の清貧な生活ぶりがうかがえる作品である。図南はひとり白雄のみに親炙したのではなく、烏明の『追善談言史』（寛政二年刊）にも作品がみえ烏明、白雄の対立を知りながら双方と親交した様子である。地方俳人にとって結社の分裂は迷惑なことで、双方に気を遣わなければならなかった。

蟻則は、天明八年四月、白雄が品川海晏寺で一門を挙げて芭蕉百回忌を催した折参加しており、仙台社中の代表的存在であったことが知られる。

鈴木道彦は『春秋稿』をみるかぎり、天明四年頃の入門であろう。はじめ三千彦と称していることを考えると、白雄入門以前朱角等三千風系の俳人に手ほどきを受けたのであろう。天明五年刊行の『春秋稿』五編に「仙台」として初めて入集するが、翌六年榎本星布が主催した白雄・暁台両評の句合ちらしでは「江都みちひこ」と補助者の中に名をみせ、同門間では重んじられている。この後、諸俳書における居所は仙台、江戸と一定しないが、天明期の自筆短冊（如毛旧蔵）[12]に「仙台医東武仮居　鈴木道彦」（如毛追記）とみえるように寛政末期頃まで江戸と仙台の間を往復している。当時本業は仙台藩医であったから役柄のうえでそうせざるを得なかったのであろう。

当初は

雪の声春の浅茅のけむるなり　仙台　三千彦

（天明七年一月春秋庵月並）

と白雄風の作品を作ったが、白雄没後大胆な意表をつく句風に変化した。白雄と道彦には性格上共通するところもあるが、道彦の方が通俗性が強い。似た性格だけに両者の関係は複雑である。

六、遅参の旅

明和七年暁台の『二編しをり萩』の旅は、コース、時間ともに白雄の奥羽行脚に共通、接近している。白雄の旅は、暁台の旅行に刺激をうけて行われたふしもないわけではない。

『二編しをり萩』[20]のコースと風交者を地域別に整理してみよう。

1. 下野今市（1名）珠明
2. 同　日光（3名）斧久・瓢左・麦風
3. 会津（1名）巨右
4. 浅香（1名）露秀
5. 福島（16名）菊明・楚江・夕芝・蕉露・左渓・呑溟・吐虹・二流・菊雄[闌]・南楚・程々・三保・有泉・一黛・芻古・伯之
6. 桑折（5名）回車・豆苗・射牛・卜而・十虎
7. 大河原（1名）芦中
8. 船岡（4名）柳美・也蓼[寥]・加生・柳風女
9. 岩沼（7名）休粋・旦水・素狂・成意・為久・一歩・千莟
10. 増田（10名）林石・生木・荘来・全来・九江・栄山・完似・習風・菊栄・車麦

11．仙台　（54名）

A．冬至庵社中（15名）丈芝（白居）・東鯉・蘭交・兎耳・鯉子・金馬・等水・麦耕（春）・一芳・東野・右幸・菊史・松雫・東扇・接天

B．是非庵社中（5名）芳角・芳泉・松蘿・雨夕・鼡来

C．嘉定庵社中（10名）橙司・茶静・白之女・野月・太英（芝）・陶家・夏雲・古道・葛道・方水

D．直庵　（5名）布朴・布珀・文木・和文・壷洲

E．山鳥庵（止）　（5名）知昂・松超・竹葉・可竟・極慮

F．武門（仙台藩士Ⅰ・5名）露角・露牛・露濯・露萩女・露珠

G．武門（同Ⅱ・5名）露鱗・露英・露滴・露峰・露萍

H．その他　（4名）千茂・拾紅・万央・汀砂

12．塩竈　（6名）魚行・鶴里・左亭・釜隣・雪徳・雨石（両）

13．高城　（5名）東雲・百馬・武山・丈車・羽音

14．古川　（5名）麦雨・雫菊・栄里・桃園・簾車

15．宮野　（5名）澄江・楚江・麟趾・白梅・不売

16．山ノ日　（5名）桑林・曲肱・菊山・笋之・里皓

右側に傍線を付した人物は、表2にも名をみせる俳人たちであるが、そのほとんどは也寥門下と思われる。彼らは特に白雄を敬ったわけではなく、旅中白雄も交際はなかった。

仙台だけでも八グループに分かれており、このうち冬至庵と止鳥庵社中は美濃派の雲裡坊系、嘉定庵は蓼太系、露角の属したFGは三千風系である。

これらの人々は前述のようにすべて暁台門に帰伏した俳人たちではなかったが、総人数は一二九名の多きにのぼり、暁台の威勢と社交性が改めて確認される。これに対し白雄は、『俳諧帋表紙』に登場する奥羽の俳人すべてをこの旅の風交者とみてもわずか十八名にすぎない。野心の人白雄がこの旅の目的の一つに松露庵俳諧の拡大を目論んでいたことはまちがいないが、蓼太、暁台を含め既成結社のガードは思いのほか固く、遅参者白雄のつけ入る余地はなかったというべきであろう。

七、記念集刊行の予定

紀行文学としての『奥羽記行』は紙数の関係上省略するが、白雄はこの奥羽行脚を何らかの形で出版することを目論んでいた。『俳諧帋表紙』に

松嶋良夜

松吹や松しまの月夜半過ぬ　志ら尾

奥羽行李の句べちに集もよひありてわづかに一句をのみ出す。

と記している。

この奥羽行脚を記念する集については全集編集当時より種々探索を試みたが、いまだにその存在を聞かない。おそらく未刊に終わったものであろう。榎本喚之に譲ったという自筆本『奥羽記行』はおそらくその未刊の記念集の一部を成すもので推定される。喚之の白雄関係書への初出は天明三年の『春秋稿』三編であるから入門は天明初年であろう。白雄の譲った時期は明らかではないが、天明期すでに白雄は記念集の刊行を断念していたことが知られる。この書が公にされていれば、旅の行程や風交者、白雄の思い等がさらに明瞭になったはずであるが、それは死児の齢いを数えるに等しく詮ないことである。

註

17 五味可都里所持『名録帳』。

18 白居七回忌集『たまくじけ仙台の部』（雄淵編・文化三年刊）の雄淵の序文に「丈芝坊白居々士はむかし翁の旅のやどりに風流のしれものなりとほのめかされし画工何がししそくなり」とあるが、地元の俳諧研究者金沢規雄氏は否定されている（筆者宛て私信）。

19 『宮城県史』14文学芸能・四四二頁。

20 『校註俳文学大系』七部集総覧編第二（同刊行会編刊。昭和六年十月刊）の翻刻による。